

宍道湖植物帯保護育成機能調査

(自然環境課特需事業：ラムサール関係)

山根恭道

1. 研究目的

宍道湖における重要魚介類の資源培養に関する調査研究の一環として、宍道湖湖岸に広がる植物帯（ヨシ帯、河口域、わんど、リーフ）の持つ水産資源に対する機能を総合的に調査し、この結果を湖岸域の環境整備に役立てる。

2. 研究方法

平成18年度の結果より、宍道湖浅場の実態の把握とそこに生息する生物の実態がある程度把握できたので平成19年度は宍道湖の漁業にとって最も重要なヤマトシジミとワカサギ・シラウオを主体とした魚類の浅場における実態を中心に調査をおこなった。



図1 人工移植されたヨシ帯（宍道湖北岸）

魚介類の生息実態

- ・魚類と稚仔魚の分布状況(引き網による調査)
- ・ヤマトシジミ稚貝の生息状況（ジョレンと10cm画のコアによる調査）

3. 研究結果

①ヤマトシジミ稚貝調査

- ・ヤマトシジミ着底稚貝は5月～7月にかけてヨシ帯で多く8月以降は減少した。
- ・ヨシ帯以外の場所についてはヨシ外とリーフ

内外で多く確認された。

ヤマトシジミの稚貝はヨシが繁茂する地域で多く確認され、ヨシ帯がヤマトシジミの付着器質として大きな役割を果していると考えられた。

②引き網による魚類調査

魚類は河口部で数量および種類数ともに多く確認された。また、北岸の人工ヨシ帯周辺では5月の調査でワカサギの稚魚が大量に確認された。（図3）

- ・5月30日の調査ではワンドを除く全地点でシラウオが大量に確認された。シラウオ以外の魚類に関してはリーフと北岸で多く確認された。また、宍道湖北岸やリーフ外、五右衛門川河口でワカサギも確認された。

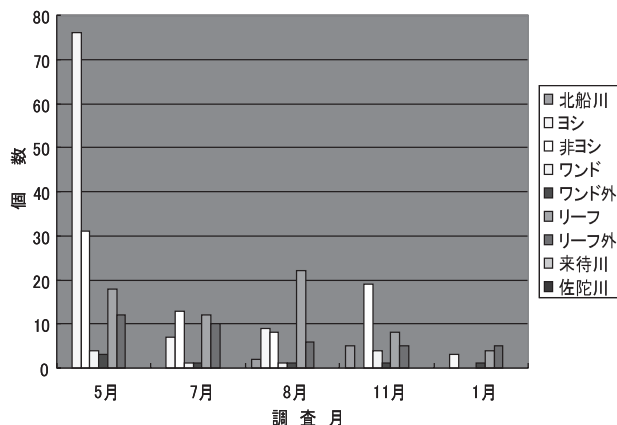


図2 ヤマトシジミ稚貝の出現状況

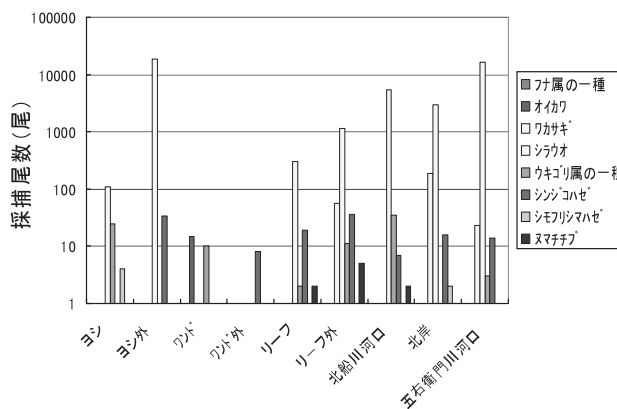


図3 平成19年度魚類調査結果

- ・ 8月28日の調査ではリーフ・北岸・河口部でシラウオが確認された他はほとんどハゼ類であった。
- ・ 11月29日の調査では引き網ではまったく採捕がなかったため、投網（5mm目）により魚類の確認をおこなった。その結果ほとんどがボラでその他はシンジコハゼが確認できただけであった。

4. 研究成果

河口部および北岸の調査地点はヨシが繁茂する周辺の調査であり、河川からの餌の供給が多いということもあるが、隠れ場としてのヨシ帯

の効果も大きいと考えられる。

今年度までの調査を総括するとヨシ帯とそれ以外の植物帯で底生生物と稚仔魚の蛸集状況などに差がみられ、ヨシ帯の稚仔蛸集機能が優れていることが明らかになった。

特にヨシ帯でのヤマトシジミ稚貝の生息密度は高く、有効な付着材としての役割を果たしていると考えられた。

宍道湖においてヨシ帯は湖内に繁茂する唯一の植生であり、生息する魚介類にとって産卵場および越夏場として、重要な役割を果たしていることが改めて証明された。